

目次

凡例

評釈

春歌廿首

- 1 春来ぬと空にしるきは春日山峯の朝日の気色なりけり……………一五
- 2 霞立ち雪も消えぬやみ吉野のみかきが原に若菜摘みてむ……………一七
- 3 梅が枝にまづ咲く花ぞ春の色を身にしめそむる始なりける……………一九
- 4 我が園を宿とはしめよ鶯の古巢は春の雲につけてき……………二〇
- 5 冬枯れの裾野の原を焼きしより早蕨あさり雉子鳴くなり……………二三
- 6 あはれにも思ひ立つ哉帰る雁さすがに見ゆる春の気色を……………二四
- 7 眺めするみどりの空もかき曇り徒然まさる春雨ぞ降る……………二五
- 8 紫の根はふ横野の壺すみれ真袖に摘まむ色もむつまし……………二九
- 9 山桜咲くより空にあくがるゝ人の心や嶺の白雲……………三〇
- 10 いかばかり花をば春も惜しむらむかつは我が身の限りと思ひて……………三三
- 11 つらきかななどで桜ののどかなる春の心に習はざりけむ……………三四

- 12 散る花の惜しさをしばし知らせばや心かへせよ春の山風……………三五
 - 13 あぢきなや何とて花の惜しからむ我が身は春のよそなるものを……………三七
 - 14 桜花思ふあまりに散ることの憂きをば風に負せつる哉……………三九
 - 15 吹く風の心と散らす花ならば梢に残す春もあれかし……………四〇
 - 16 道遠く何たづぬらむ山桜思へば法の花ならなくに……………四一
 - 17 桜花待つと惜しむとするほどに思ひもあへず「す」ぐる春哉……………四三
 - 18 桜咲く麓の小田の苗代は種よりさきに花ぞ散りける……………四四
 - 19 ますらをは同じ麓をかへしつゝ春の山田に老いにける哉……………四四
 - 20 ゆく春の霞の袖を引き留めてしをるばかりや恨みかけまし……………四六
- 夏歌十首
- 21 夏くれば衣がへして山がつのうつき垣根も白重也……………四五
 - 22 ちはやぶる賀茂の社の葵草かぎす今日にもなりにける哉……………三五
 - 23 さらぬだに臥すほどもなき夏の夜を待たれても鳴く郭公かな……………三六
 - 24 郭公鳴きゆく方に添へてやる心いくたび声を聞くらむ……………三六
 - 25 五月こそなれが時なれ郭公いつを待とて声惜しむらむ……………三六
 - 26 夏も猶あはれは深したち花の花散る里に家居せしより……………三六
 - 27 五月雨は焚く藻の煙うち湿り潮たれまさる須磨の浦人……………三六

- 28 庭の面の苔路の上に唐錦しとねに敷ける常夏の花……………三六
- 29 小舟さし手折りてそでにうつしみむ蓮の立ち葉の露の白玉……………三七
- 30 いつとても惜しくやはあらぬ年月を御襖に捨つる夏の暮れ哉……………三九

秋歌廿首

- 31 八重葎さし籠りにし蓬生にいかでか秋のわけて来つらむ……………三七
- 32 萩の葉も契りありてや秋風のおとづれ初むるつまとなりけむ……………三七
- 33 七夕の舟路はさしも遠からじなど一年にひとわたりする……………三七
- 34 みしぶつき植ゑし山田に引板はへてまた袖ぬらす秋は来にけり……………三七
- 35 なにごとも思ひ捨つれど秋は猶野辺の景色のねたくもある哉……………三八
- 36 夜もすがら妻どふ鹿の胸分にあたら真萩の花散りにけり……………三八
- 37 身の憂きも誰かはつらき浅茅生に恨みても鳴く虫の声かな……………三八
- 38 夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里……………三八
- 39 露しげき花の枝ごとに宿りけり野原や月のすみかなるらむ……………四〇
- 40 石ばしる水の白玉数見えて清瀧川に澄める月かな……………四〇
- 41 月よりも秋は空こそあはれなれ晴れずは澄まむ甲斐なからまし……………四〇
- 42 月の秋あまた経ぬれど思ほえず今宵ばかりの空の気色は……………四〇
- 43 いかにしてそ「でにひか」りの宿る覽雲井の月「は隔てし身を」……………四三

44	秋の月またも逢ひ見む我が心つくしなはてそ更級の山……………	一〇六
45	月も日も別れぬものを秋来れば夜を長しとも誰定めけむ……………	一〇七
46	夢さめむ後の世までの思ひ出でに語るばかりも澄める月哉……………	一一〇
47	この世には見るべくもあらぬ光哉月も仏の誓ならずは……………	一一二
48	衣擣つ響は月の何なれや冴えゆくまゝに澄みのぼるらむ……………	一一四
49	山川の水の水上尋ね来て星かとぞ見る白菊の花……………	一一八
50	元結の霜置きそへてゆく秋はつらきものから惜しくもある哉……………	一二二
冬歌十首		
51	いつしかと冬のしるしに童田川紅葉とぢませ薄氷せり……………	一二九
52	まばらなる楨の板屋に音はして洩らぬ時雨は木の葉なりけり……………	一三三
53	風さやぐさ夜の寢覚の寂しきははだれ霜降り鶴さはに鳴く……………	一三五
54	月清み千鳥鳴くなり沖つ風吹飯の浦の明け方の空……………	一三七
55	月冴ゆる氷の上に霰降り心碎くる玉川の里……………	一四〇
56	空に満つ愁への雲の重なりて冬の雪とも積もるなりけり……………	一四四
57	雪降れば道絶えにけり吉野山花をば人の尋ねしものを……………	一四七
58	冬の夜の雪と月とを見るほどに花のときさへ面影ぞ立つ……………	一四八
59	小野山や焼く炭竈にこりぞ積むつま木とともに積もる年哉……………	一五一

恋歌廿首

60	ゆく年を惜しめば身には積もるかと思ひいれてや今日を過ぎまし……………	一五四
61	思ふよりやがて心ぞうつりぬる恋は色なるものにぞありける……………	一五六
62	散らば散れ岩瀬の森の木枯に伝へやせまし思ふ事の葉……………	一六一
63	年経れど人の心はつれなくて涙は色の変はりぬるかな……………	一六五
64	あぢきなや思へばつらき契り哉恋はこの世に燃ゆるのみかは……………	一六七
65	深くしも思はぬほどの思ひだに煙の底となるなるものを……………	一七〇
66	頼めずはなかく世にもながらへて久しく物は思はざらまし……………	一七三
67	奥山の岩垣沼の浮きぬなは深き恋路になに乱れけむ……………	一七四
68	人心浮田の杜に引く標のかくてややがて止まむとすらむ……………	一七七
69	涙河袖のみわたにわかかへりやるかたもなき物をこそ思へ……………	一八一
70	露結ぶ真野の小菅の菅枕交はしてもなぞ袖濡らすらむ……………	一八四
71	恋をのみ飾磨の市に立つ民の絶えぬ思ひに身をや替へてむ……………	一八七
72	いかにせむ海人の逆手を打ち返し恨みても猶あかずもある哉……………	一八九
73	忘れ草摘みに来しかど住吉の岸にしもこそ袖は濡れけれ……………	一九二
74	思ひわび見し面影はさておきて恋せざりけむ折ぞ恋ひしき……………	一九五
75	いかばかり我を思はぬ我が心我がためつらき人を恋ふらむ……………	一九九

- 76 人をのみにに恨みけむ憂きを猶恋ふる心もつれなかりけり……………三〇一
- 77 恋しきに憂きもつらきも忘られて心なき身になりけるかな……………三〇三
- 78 厭ふべきこは幻の世「の」中をあなあさましの恋のすさびや……………三〇五
- 79 しき忍ぶ床だに堪へぬ涙にも恋は朽ちせぬものにぞありける……………三〇七
- 80 始めなき昔思ふぞあはれなるいつより恋にむすほれけむ……………三一〇

雑歌廿首

- 81 幾返り波の白木綿かけつらむ神さびにける住の江の松……………三二六
- 82 思ふこと三輪の社に祈りみむ杉は尋ぬるしるのみかは……………三二九
- 83 朝日さす高嶺の花は匂へども麓の人は知らずぞありける……………三三三
- 84 聞き初めし鹿の園にはこと変へて色々になるよもの紅葉葉……………三三八
- 85 雲も皆むなしと説くに空晴れて月ばかりこそ澄み増さりけれ……………三三〇
- 86 遙かにも匂ひける哉法の花後の五百歳なほ盛りなり……………三三三
- 87 惜しむかな月のみ顔も影消えて鶴の林に煙絶えけむ……………三三四
- 88 世の中を思ひつらねて眺むればむなしき空に消ゆる白雲……………三三八
- 89 常に澄む鷺の御山の月だにも思ひ知れとぞ雲隠れける……………三四三
- 90 暁と聞きて出でつる別れ路をやがてくらすは涙なりけり……………三四五
- 91 浦伝ふ磯の苫屋の梶枕聞きも習はぬ波の音哉……………三四八

- 92 四極山檜の下葉を折り敷きて今宵はさ寝む宮こ恋しみ……………三五二
- 93 我が思ふ人に見せばやもろともに隅田川原の夕暮れの空……………三五四
- 94 遙かなる芦屋の沖の浮き寝にも夢路は近き宮こなりけり……………三五七
- 95 住み馴れし住みかも常の住みかかは旅を旅ともなに思ふらむ……………三五九
- 96 君が代は斧の柄朽ちし山人の千度かへらむときも変はらじ……………三六二
- 97 まことにや松は十かへり花咲くと君にぞ人の問はむとすらむ……………三六五
- 98 花の色にあかず見ゆれば帰らめや渚の宿にいざ暮してむ……………三六七
- 99 峰続き山辺離れず住む鹿も道迎るなり秋の夕霧……………三六九
- 100 敷島や大和島根の風として吹き伝へたる言の葉は……………三七二 (長歌)
- 101 山川の瀬々の泡消えざらば知られむ末の名こそ惜しけれ (反歌)……………三六七

解説

- 1 俊成久安百首の成立とその世界……………三九七
- 2 『俊成久安百首』と『部類本(谷山茂氏旧蔵本)』その他との歌番号対照表……………三三三

おわりに

索引

- 俊成久安百首歌全句索引……………三三一
- 引用和歌初句索引……………三三二

えてしまったよ。「ぬ」は完了の意を表す助動詞「ぬ」の終止形。「や」は感動の意を表す間投助詞。ここで小休止があり、二句切れ。◇み吉野 奈良県吉野郡の地名。「み」は美称の接頭語。吉野は、現在の吉野町を中心として吉野川一帯から吉野山をも含んだ総称としての名にもなる。◇みかきが原 「みかき」は、御垣で、もともとは宮中や貴人の邸宅の築垣のあたりの野原をさす。「御垣の原」ともいう。ここでは、大和の国の歌枕として用いられており、吉野離宮の「みかきが原」をさしている。◇若菜 春先に芽を出し食用となる草の類。正月の初子の日や七日の白馬の節会の日に若菜を摘み、その年の邪気をはらい、不老不死を願って羹として食した。◇摘みてむ 摘もう。「てむ」は、完了の助動詞「つ」の未然形に推量の助動詞「む」の付いたもので、強い意志や決心を表す。

【評】 部類本「春歌上・若菜」(四〇)。

立春詠に続き、春の訪れを喜ぶ気持ち、子の日の若菜摘みの行事でもって詠んだ歌。

ここでも「みかきが原」という地名が解釈の鍵を握っている。年中行事としての若菜摘みが行われる伝統的な地は春日野であるが、春日(野)は一番歌において既に詠まれていることもあって、吉野の「みかきが原」が選ばれたのである。吉野は、古来、信仰の地として著名であり、応神天皇以後しばしば行幸があり、宮滝付近には歴代天皇の離宮が営まれた。万葉時代は「吉野川」が、平安以降は「吉野山」がよく詠まれるようになる。吉野は、不遇な者の隠遁の地として、また雪の深いところとしてのイメージを持っているが、よく知られる桜の名所であるというイメージを決定づけたのは西行以降であるという(『和歌大辞典』)。ここでは、古来歴代天皇の離宮が営まれた崇敬に値する地としての吉野の離宮のあたりの「みかきが原」で、新春の若菜を摘むというところに意味があるのである。

俊成の時代までに吉野の「みかきが原」を詠んだ歌は、「故郷は春めきにけり吉野山みかきの原を霞こめたり」(兼盛集・九〇)、「み吉野のみかきの原は荒れぬとも花や昔の色に散るらん」(林葉集・一六四)、「み吉野のみかきが原に風吹けばもみぢも雨と降りにけるかな」(教長集・五〇六)の三首がある。俊成歌は、兼盛歌の影響のもとに詠まれたことは

明らかで、兼盛歌にない若菜摘みを加えたのである。若菜摘みについては、見慣れた都の近郊の野ではなく、離宮があったとはいえ、今は鄙びてしまった吉野の「みかきが原」で若菜を摘もうというところにかえて新鮮なものを感じるのである。佐々木忠慧氏は、俊成のこの歌をとりあげて、「御垣原の若菜摘みの発想は俊成による新しい趣向である。」と述べている。みかきが原での若菜摘みの歌は、俊成歌以前にはなく、俊成の子定家に二首(拾遺愚草および同員外)、西園寺実兼(嘉元百首)・源忠房(文保百首)に各一首がある。

『続後撰集』(春上・三二)に入集。

3 梅が枝にまづ咲く花ぞ春の色を身にしめそむる始なりける

【歌意】 梅の枝にまず咲く花、つまり梅の花こそ、春の気配をその身で体現する魁をなすものであったなあ。

【語釈】 ◇梅が枝にまづ咲く花 梅の枝にまず咲く花、つまり梅の花。◇春の色を 春の気配を。春が春だと感じられる様子。気配。漢語「春色」より出た語。「玉管陽気を吐き、春色禁園に啓く。／＼(玉管吐陽気。春色啓禁園。)(懐風藻

〈古典大系本〉・春日・一九・巨勢多益須、「誰か言つし春の色を東より至ると 露暖かにして南枝に花始めて開く／＼(誰言春色従東到 露暖南枝花始開)」(和漢朗詠集・梅・九二・菅原文時)などが知られる。和歌では、「春の色」のいたりいたらぬ里はあらし咲ける咲かざる花の見ゆらん」(古今集・春下・九三・読人しらず)が早い例。◇身にしめそむる「しめ」は、「染め」で春の色が身に染まってゆく、つまり春の気配を自分の身で体現すること。「そむる」は、「初むる」で補助動詞として機能している。古典大系の頭注は「身に占めるの意か。染(し)めるの意とも。」と複数の解を示して、「身につけ染める」と口語訳し、「占める」の方をとっている。◇始なりける 「花ぞ……始なりける」で係り